第473号 昭和59年11月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1984年（昭和59年）
11月号（No. 473）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

円空の六頂仏と穂高嶽登頂
広瀬　誠……（1）
宿命の幕切れ—「エヴェレスト・未踏の山稜」を読んで—
島田　巽……（2）
海外の山
ロッククライマーとヒマラヤンクライマー……（2）
図書紹介……（3）
「高所登山における雪崩事故」
「登山家素描」「続・中高年向きの山」
「秩父・奥武蔵　伝説たわむれ紀行」
「山麓の生活誌」
東西南北……（4）
「チロル・エッツタールに歌う」
「ラダックのゴンパ巡礼記」
「梓会創立秘話」「三田幸夫さん宅を訪ねて」「スイス山岳会会長ご夫妻歓迎会」
追悼　網倉志朗氏……（8）
報告……（9）（10）
お知らせ……（10）
会務報告・会員移動・ルーム日誌……（10）
八十周年記念募金応募者ご芳名……（10）
図書受入報告　図書委員会……（11）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

円空の六頂仏と穂高岳登頂

広瀬　誠

北飛騨の山あいには不思議ないのちが息づいている。曲りくねった山峡の道を行くと、たたなずく緑の山の間から、雪を光らせた高岳がいきなり姿を見せ、心をときめかす。思いがけぬところから焼岳がぬっと現れて噴煙を吐き、あるいは笠、あるいは黒部五郎、等々が見えてくる。私が祖先の遺跡をたずね広瀬城跡の山に登ったとき、まっ白な乗鞍・御岳が相並んで見えたのも忘れがたい思い出だ。

嘉永五年（一八五二）曽我耐軒は飛騨の紀行『幽討秘録』を書き、それが小島烏水を深くひきつけた。志賀重昂は明治二十九年「飛騨に入るの記」を書き、『日本風景論』に挿入。烏水もまた明治三十三年飛騨縦断の旅を試み、これを『山水無尽蔵』に書きとどめた。俳人前田普羅も限りなくこの地を愛し、詩情したたる名紀行文「奥飛騨の春」を書いた。ウェストンが笠ケ岳を目ざして三たび分け入ったのも飛騨路であった。

古く、播隆上人も飛騨路を巡錫して、廃絶していた笠ケ岳への道を開き、さらに飛信国境にそそり立つ槍ケ岳の威容に打たれて、その登頂を志した。宿願を果たして槍の絶頂を極めたのは信州側からであったが、まず大槍の尖頂に目を見張ったのは飛騨側からであった。

文政六年（一八二三）播隆が笠ケ岳頂上を極めたとき、頂上に残されていた二枚の鉄札を見つけて持ち帰った。この鉄札は現在、本覚寺（吉城郡上宝村本郷）に所蔵されているが、その一枚には「奉興立傘嶽大権現本地薬師如来」「天明二壬寅年六月如意殊日」「本願主　現住宗猷北州誌」と刻まれ、いま一枚には南裔の名が刻まれている。天明二年（一七八二）南裔・北州両僧が笠ケ岳に登頂した事実をまざまざと物語る遺物である。そしてこれよりもさらに古く、元禄年中（一六九〇前後）円空が登頂して大日如来を安置したことは本覚寺の古記録『大ケ嶽之記』に明記するところである。

播隆もまた文政七年（一八二四）笠ケ岳頂上に銅造弥陀如来像を安置して来たが、この仏像は現在、盗難を避けるため山麓におろされ、上宝村村上の村上神社境内に播隆塔を築き、その中に納められている。播隆塔の題字は槙有恒氏の揮毫である。

飛騨路を歩くと、どの寺にも円空彫刻の仏像が祀られている。円空仏は稚拙粗剛な荒彫りの中に神話さながらの渾沌たる力を横溢させている。あるものは激しく迫り、あるものは優しくひきつけ、一体一体不思議な魅力に満ちている。その中には白山権現がおびただしく、円空の白山信仰をうかがわせるが、立山明神像も一体発見されている。（下呂町小川神社所蔵。現在同町の博物館に展示）。

私が北飛騨をめぐったとき、上宝村長倉、臨済宗桂峯寺の本堂正面には三体の円空仏が安置されていた。一体は「今上皇帝」像、元禄三年（一六九〇）円空が十万体の作仏を成就し大願を達成した記念作として、端厳な天皇像を彫ったもので、その心情は背銘にまざまざと記されている。一体は童頭像で、円空が双六岳に登ろうとしたが、谷川が氾濫したため、この像を彫って祈願し、谷の荒びを鎮めたという伝承のある像だ。いま一体は十一面観音の姿であるが、十一面ではなく、仏頂に六面の小仏頂を配した、いわば六頂仏だ。住職の話では、六仏頂の裏銘に、乗鞍岳・穂高岳・笠ケ岳・錫杖岳・双六岳・硫黄岳の六山名が記されているという。

私がこれを拝観したのは昭和五十三年であったが、その後、丸山尚一氏著『円空風土記』（昭和四十九年刊）を見ると、この三仏は、金木戸部落の白山神社と背中合わせに観音堂があって、そこに祀られてあったという。丸山氏の記述では金木戸部落は過疎で、戸数わずか二戸とあるから、その後廃村となって、仏像は桂峯寺に遷座されたのであろう。

丸山氏の記述では、六頂仏の裏銘は「乗鞍嶽、保多迦嶽（穂高）、伊応嶽（硫黄）、錫杖嶽、四五六嶽（双六）」で、いま一つ墨が消

みんなで八十周年記念事業を成功させよう！

お知らせ電話 234六六五九

え、判読困難なのは笠ケ岳であろうという。私は住職の話を聞いただけで、裏銘までは直接見せてもらえなかったが、丸山氏は懐中電灯でくまなく調べたのだという。

双六岳も笠ケ岳も円空が登頂した山だ。他の四岳もおそらく円空が登ったのだと思う。本覚寺の『大ケ嶽之記』にも「円空聖人、当郡五嶽練行」と記されている。いくつもの峯に登って修行したのだ。穂高岳には後年（文政十一年、一八二八）播隆が登り仏号石を安置して来た。それに先立って元禄の円空もまたその一角に足跡を印したことは、ほぼまちがいないと思う。円空は何も登山の記録を残さなかった。山に登り、山に満ちみちた神気を味わい、その感動を神仏像に刻みつけただけだ。その「記されざる登山記録」を私は思うのである。

宿命の幕切れ

――「エヴェレスト・未踏の山稜」を読んで――

島田　巽

ボニントンとクラークの共著 Everest: the unclimbed ridge は、一九八三年の刊行なので、今さら紹介するまでもあるまいが、一読者としての感慨を記すことを許されたい。

書名にある未踏の山稜とは、チベット側のノース・コル経由より一段と長い東北東稜のことで、本書では単に北東稜と呼ばれている。

一九八二年のプレ・モンスーンに行なわれた、この遠征が注目されたのには、それなりの理由があった。戦前、チベット側から七回にわたる挑戦をくり返してきた英国にしては、ちょっと信じられないことだが、第一次偵察から六十一年目、第七次のティルマン隊からでも四十四年ぶりの見参だったのである。従って、苦闘の刻みこまれたチベット側の舞台へ、ようやく復帰した感慨が、本書のなかに織りこまれているのも当然といえる。

その長い空白の後に、ボニントンを先頭に登攀チーム四人、サポート二人の少数精鋭で、残された難ルートからの登頂を狙った結果が、二名の遭難におわったのであるから、英国隊の挫折感は深刻であったに違いない。

しかも、ボードマンとタスカーという英国屈指のクライマー達の、未踏の山稜で消息を絶った情景が、ボニントンの文章から、一九二四年のマロリーとアーヴィンの場合を、つい連想させるのであ

海外の山

片山全平氏絶筆

ロッククライマーと ヒマラヤンクライマー

「ボルダーリング」「フリークライミング」ならまだしも、「岩登り競技」となると、この紙面にはなじみにくい。しかし最近の登山の傾向として取り上げてみた。

九月、ソ連のクリミヤで国際岩登り競技会があり、日本をはじめ地元のソ連、仏、西独、東欧諸国など十カ国の参加選手が設定ルートでタイムを競った。

十月に入って、ソ連、韓国のクライマーが日本に招待され、六甲の岩場でロッククライミング・フェスティバルが開かれた。頂上を極める手段だった岩登りは、いま独自の方法で、一人歩きし、人工登攀用具技術の援用を排除し、フリークライミングとなってタイムを競い、あるいはより困難な箇所の克服に楽しさを求めるようになった。

クリミヤのレースでは、六〇～七〇㍍のルートの上に六級の難場が連続的にセットされ、従来より極端に難易度が高められていたが、ソ連、東欧など欧州勢との実力差に日本代表の国体選手は、かぶとを脱いで帰ってきた。

フェスティバルにはソ連からイワノフ、ベルショフのエベレスト登頂組がやってきた。イワノフは当時の第一次登頂者であり、ベルショフは真夜中の登頂者として知られる。彼らの岩登りの技術も最高で、ガイドブックに二、三時間所要とあるルートも二、三分の早さ、日、韓のトップ・クライマーより三、四倍のスピードだったと、高橋善数氏は驚いていた。

タイムという無限に縮少できるものを前提とするため、果てしない挑戦的エネルギーを吸収し、同時に、自然を対象とするためゲレンデは世界的な広がりとむずかしさを持つことになる。従って、これに対処する肉体は極度に錬えなければならない。このため「高度に対する魅力（登高）は消滅」というのが現実である。しかし、この一連のフリークライミングを「赤裸々な個人の能力を試す場」としてアラン・ラウスは評価している（英マウンテン誌）。

集団登山において、個をチームに埋没させるか、高度の技術を持つ個人を優先させ、そのうえでチームを作るかの問題は、登山とは違うが、九月に来日したフランス・チームの、いわゆるシャンパン・ラグビー好きの人には了解ずみのことである。

命綱に支えられる岩登り競技、これをも排除するボルダーリングやフリークライミングなど、この分野へのさまざまな論議は別にして、ラウスが言う「ベスト・ロッククライマーとベスト・ヒマラヤンクライマーとのつながりのなさ」は英国の現状らしいが、日本もその傾向にある。これはこれでいいのだが、高度への挑戦を忘れては登山家の意味はない。これはここ十年の過渡期の現象で、ラウスは「フリークライミングが岩場の克服の最良方法であると同様、遠征登山はアルパイン・スタイルが最良の方法」と将来の効率的な遠征登山法を打ち出している。

もちろん、チョモランマで姿を消したボードマンやタスカーの遭難による反省は、単一のペアでなく、複数ペアのアルパイン・スタインを推奨させている。

（片山全平）

る。

ボードマンらが、山稜に掘り進んだ三番目の雪洞は、七八五〇㍍地点にあった。下降の折のサポートとして、ノース・コルへ向かったボニントンと雪洞の間の無電連絡は、五月十六日の夕刻、好調に行なわれた。

翌朝も快晴で、八二〇〇㍍を越える山稜上に立ちはだかるピナクルに取組む二人の姿が、ボニントンの望遠鏡で鮮明に眺められた。そして午後九時、夕陽が頂稜に没するころも、まだ行動する姿が認められたという。だが、それがラスト・シーンとなり、交信も途絶えた。

その時から五十八年前の六月八日、北東稜の第一ステップあたりを登るマロリーとアーヴィンの姿を、七九〇〇㍍の地点で目撃したオデールの場合と、あまりにも似た情景である。この時のオデールの悲痛に満ちた捜索努力と同じように、ボニントンらもカンシュン側で必死の捜索を行なったことが詳述されて、本書のクライマックスとなっている。

＊　＊

共著者クラークはサポートとともに医療を担当して、重要な役割を果たしたが、執筆でも半分近くを引受けている。ボニントンの文章は口述筆記だが、クラークの表現にはゆったりした味がある。ボードマンが生還していたら、すぐれた登攀記が書かれたに違いないが、（彼の文章については本誌第四六一号で触れた）、本書では、遺された日記の引用で、彼の豊かな感受性を偲ぶほかない。

クラークはエヴェレスト登山史に幅広く眼をくばって、往年の英国隊の足跡を、ノスタルジアを感じながら探し求めている。とくにロンブクで一九二四年当時のB・Cは何処かと探しまわるあたり、いかにも伝統を重んじる英国人らしい感じを受ける。

かつてマロリーたちの遭難後、サマヴェルとビーサムが主となって、ロンブクの小丘上に、かなり大きな記念のケルンが築かれた。これは既にティルマン隊の折にも残っていなかったというし、四年前の本会の遠征隊員の眼にも触れなかった。クラークも余り期待せずに探していたようだ。それが、堆石の丘を降りかけているとき、たまたま靴に当ったスレートの破片に、192 の三字が刻まれているのを認めた。これは…と更にあたりを探すと、半世紀余も前の記念碑の文字が散らばっていた。

それは、まだB・Cで中休みの頃のことだったから、クラークとしても、一カ月も経たぬうちに、自分たちの手で、新しい記念碑を二人の僚友のために、同じロンブクに築くことになるなど、思いもしなかったろう。

エヴェレスト北面と英国隊、な

新刊の本紹介

登山家素描

水野　勉著

著者が三十歳前後から、近年にかけて山の雑誌に書いた人物エッセイ集で、対象は戦前からの著名岳人である。通読すると、正直いって、人物よりも著者の視点が印象に残る。著者自身があとがきで、先輩たちに関わるうちに自画像を試みる結果になった旨を記しているから、右の印象は当らずとも遠からずだろう。そこで、ここでは著者の視点を紹介したい。

登山家論としてユニークなのは、松方、浦松評だ。秀れた知識人なのに実生活では、その批判精神が、「たったひとりの山」に逃避し、また、衰えてあいまいな上品さのなかに韜晦した、と指摘されている。対蹠的なのが、今西錦司とティルマンへの満腔の共感であ

高所登山における雪崩事故

——シンポジウム記録——

日本山岳会高所登山研究委員会編

本書は、一九八三年二月五日に日本山岳会高所登山研究委員会が実施した「高所登山における雪崩遭難」をテーマとした、シンポジウムの報告書である。この企画は、前年度に実施した「八千㍍峰の無酸素登山とライト・エクスペディション」（「山岳」第七十七年掲載）に続くものである。一部会員や関係委員から、次は的を雪崩にしぼって実施してほしいという要望が出され、委員会としても雪崩遭難の頻発している現状から、その必要性を痛感していた。

報告書の内容は、まず「序に代えて」で、委員長金坂一郎氏がシンポジウムの内容を理解しやすくするために、雪崩の分類、雪崩予知の着眼点、雪崩遭難の型、登山計画の検討、行動中の雪崩判断について、図や表を使って説明している。

主題のシンポジウムは、司会松永敏郎、発表者甲府昭和山岳会アラスカ・フォーレイカ登山隊一九七六年芦沢剛司、日本山岳会チョモランマ登山隊偵察隊一九七九年長谷川良典・横山宏太郎、日本山岳会学生部インド・ヒマラヤ登山隊今野善郎、総括金坂一郎の諸氏により実施されたもので、参加者は五十六名であった。

事故例概要は、各隊の遭難状況を整理したもので、前記三隊の外に松永氏の参加した日本山岳会信濃支部アンナプルナ登山隊一九七三年を追加しているが、発言者登山歴を含めて、シンポジウムの理解を深めるためのものである。

末尾の付録には、日本ヒマラヤ協会の尾形好雄氏が作成し、本委員会が一部加筆した「日本隊の雪崩遭難事故例一九七〇～一九八二」が紹介されている。内訳は、ネパール二十九隊、インド七隊、パキスタンおよびアフガニスタン計七隊、アラスカ二隊、その他四隊である。

この表によれば、十三年間〈

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

にか宿命的なものを感じさせられる。

Everest : the unclimbed ridge by Cris Bonington & Charles Clarke, London, 1983, Hodder and Stoughton, 132 pp., £ 10.95

今年の夏のヨーロッパは八月に入って雨が降り、高山植物が一斉に咲き始めて、アルペンローゼ、リンドウ、エーデルワイスとスイスの三大名花が一緒に見られた。

マッターホルンをめぐる花の高原歩きを終えて、去年は列車での移動だったが、今年はバスで国境を越え、途中切手王国のリヒテンシュタインで昼食休憩後、谷間の町オーバーグルグルへ着いたのは午後五時ころであった。

私たちがその夜泊る宿は、この地でも立派なエーデルワイスというホテルで、正面の外壁に大きな花の絵が描かれてある一番豪華な建築で、こんな谷の奥に…と驚くばかりであった。

バスを下車すると、ホテル前の広場に屋外ステージができていて、ちょうど八月十五日のマリア祭の最中であった。急作りのバンド小屋からは、テンポの早い音楽が響き、町の人たちが、屋台でワインを飲んだり、踊ったりして沸きかえっていた。

私たちはその光景を写真に撮ったりして、珍らしげに眺めていると、舞台の司会者から、男性で学校の先生の岩月さんに声がかかり、皆でジャパン・グループの歌をステージに上ってやって欲しい

東・西・南・北

チロル・エッツタールに歌う

坂倉登喜子

スイスの山の町ミューレンでのあけくれは、いつに変らぬ透明な光に包まれた自然の中で、心安らぐ日々を過ごすことができた。

七月に風見夫妻と原田会員が泊られた同じエーデルワイス・ホテルは、私たちの毎年行く常宿で、日本山岳会の故神谷恭さん一行が昔行かれた時のサイン帖があって何となく、親しみの持てるマダムがいることも、ここの魅力の一つであった。いつのまにか毎日山へでかけているうちに三日間が終り、マダムとまた来年…と手を振り振り別れて、最後の目的地オーストリアのエッツタールへ移動する朝は、朝霧の晴れた快晴の空に、白銀に輝くアイガー、メンヒ、ユングフラウの豪華な山群が、私たちを見送ってくれた。

り、山と実生活に垣が無く、未知の探求、真実の追求が、山から人生全般に及ぶ生きざまとなっているとして、これへの熱い肯定が述べられている。ここに一つの理想像があるが、もうひとつの視点も見逃すわけには行かない。欧州アルプス的思想よりも、田部重治で語られる土着思想への傾斜だ。人物嗜好もこれとつながり、ありていの板倉勝宣を半分ハイカラな大島亮吉より身近かに置いている。

エッセイに暗示的ないい回しが多いのに、読者を一気によませるのは、流石に手馴れた筆の力だ。だが、一考すると、理想とする山と人生不可分の高貴な姿勢は、普通の生活人には望んで容易に手に入るものではない。またこうした人生も望むらくは土着思想に支えられまほしという点だが、この二つの事柄の論理のつながりで思案に暮れる読者も多いのではないか。

登山がスポーツとして完全定着した今日、人生論的な山の本はますますまれで貴重だが、それだけに本著がすんなり読めることが望ましい。そのためには著者が若い頃、天皇制信仰から離脱し、山と自然を全人格的に享け入れた出合いを、それ以来著者がいだく反俗思想の原点として、本書のどこかでまとめて説明してほしかった。

そうすれば、ヤングハズバンドにささげた星辰賛美の長い章も、

／で、雪崩に襲われた隊の総数は四十九隊、死亡者は八十九名（内二十二名現地人）である。テントが襲われた数が意外と多く、季節別では秋が多い。雪崩遭難では、一度に大量の死傷者が出やすいが、負傷者を加えると、十三年間で百十九名という驚くべき数となる。

雪崩は、人事を尽くしても判断しきれない予測不可能な難しさがある。しかし、「序に代えて」で金坂氏が説明しているような、すでに解明されている部分や、それに基づく予知・予防については、予め十分に研究し、実際の登山に役立つ知識として、しっかりと体得しておくべきである。

雪崩遭難については、その時のいろいろの事情で、事実に即した正確な発表や率直な発言が困難なため、曖昧な表現になりがちである。そのため実態把握が難しく、事故の持っている教訓が、正確に登山者に伝わりにくい。このシンポジウムを実施するにあたり、委員会は上記のことを念頭におき、可能な限り事実に即した率直な発表になるよう、計画を推進した。開催までの一年間、金坂氏を中心に、発表者を交えて、たび重なる検討や、予行演習を行なった。この結果、今までのものより格段に具体的で率直な質疑応答が展開され、参加者にとっても理解しやすく、実戦に役立つ内容になったと自負している。

先に述べたように、本書では雪崩の基礎的な知識から出発し、予知・予防を含めて、雪崩遭難の実態が生の体験として詳細に発表されており、幾つかの示唆に富んだ、貴重な教訓を提供している。掛け替えのない生命を無駄に失わないために、これから海外登山を試みる人達は勿論、日本の積雪期登山を行なっている人達も、ぜひ熟読し参考にしていただきたい。

B5版　五八ページ　一九八四年三月　日本山岳会刊　定価六〇〇円　送料二〇〇円

（高所登山研究委前理事　川上　隆）

ヤングの詩訳も、著者の思想の美しいふくらみとして一層優しくその場を得るような気がする。

昭和五十八年七月十九日　鹿鳴荘発行　二九一ページ　頒価三八〇〇円　（田口二郎）

●ご希望の方は、山岳会事務局まで申込んで下さい。

続　中高年向きの山
一〇〇コース（関東編）
浅野　孝一著

と所望された。

山のスタイルをした五十名近い一団がこの町を訪れたのだから町の人は嬉しかったのかも知れないが、ドイツ語のできる村上ドクターが、リーダーはこの人、と私を紹介されたので、何とも引込みがつかず、それではと今年のウェストン祭に京都から参加協力してくれた水江先生にマイクの中心になって貰い、先ず日本の歌「さくら、さくら」を歌った。すると凄いアンコールを受けた。それではと今度は得意の「エーデルワイスの歌」を、そして最後に「今日の日よ、さよなら」の三曲を歌った。

私はとっさに仕方なく急拠、歌に合せて指揮をとった。

生れて始めての冷汗もので、何とか済んだが、エッツタールの谷間に、私たち五十名の混声コーラスが響いて、下手ながらも町の人たちとの交歓ができた。これは今年のハプニングであった。

翌日リフトを乗り継いで、ホーエ・ムートまで行き、尾根を氷河の末端まで登り、トラバースしてロトモース谷をくだった。

その日リードしてくれた二十三歳のたくましいガイドが、山でエーデルワイスが見つからず、残念がっていたから…と、夕方私のために三本のエーデルワイスを持ってきて、プレゼントしてくれた。

私はその山男の優しい心がとても嬉しくて、その夜コップにさして眺めた後、押花にして持ち帰り、私のコレクションに加え、いつまでも保存することにした。

今回JACからはヨーロッパの山の俳句取材の小林会員と、団体山行の点呼などに協力してくださった大木先生の参加もあって、いろいろハプニングもあったが、とにかく、皆さんが良い思い出を残し、少しでも心の財産のための努力がむくいられれば幸だと思った。

ミュンヘンでは本場のビールの大ジョッキで、山行の無事を祝い、全員で合唱して別れを惜しみつつ打上げをして帰途についた。

ラダックのゴンパ巡礼記

山口 一孝

私は七月一日から十一日間アルパイン・ツアーサービス社のラダック行のツアーに参加した。一行十七名、リーダーは同社の経験豊かな山男、麻田氏で、現地でガイド、グル氏が加わった。

インドの北辺ラダックの緯度は約三四度で日本と変らないが、高度は三五〇〇㍍を超え、草木を留めない岩峰と巨大な紡錘形の砂礫の堆積と、荒漠たる砂漠で形成されていて、正に〝月世界〟の形容がふさわしい。その厳しい冬景色はNHKのテレビで紹介されているが、七月の抜けるような青空に

昨年の五月についで、再び「続」の名を冠して、体裁、内容ほぼ同じガイドブックがこのほど上梓された。前編の好評に応えたものと思うが、それだけに高齢化社会を迎え、中高年の登山者が増加してきたということになろう。

内容的に見ると前編の一二地域に対して今回は一四地域。奥多摩・奥武蔵一五コース、奥秩父五コース、大菩薩周辺四コース、武相国境・道志山塊周辺六コース、丹沢・箱根一三コース、湘南・三浦・房総六コース、駿河・伊豆周辺四コース、富士山とその周辺一二コース、西上州とその周辺六コース、浅間山周辺四コース、日光とその周辺八コース、常陸の山々四コース、上越の山々六コース、信州の山々と頚城山塊七コースが掲載されている。当然、中高年対象のこと、季節は無雪期、ほとんどが日帰りか或いはせいぜい一泊が多い。すべてガイドの末尾にはコースタイム、交通、問合せ先、五万か或いは二万五千の地図名、巻末に交通問合せ先一覧、山名索引などのデータが入れられ利用者の便益を計っている。

昨年の一〇〇コースに続いて、この短期間のうちに著者浅野氏は精力的によくこれだけの調査をしたものとその情熱には深く敬服させられる。

早速、自分の山歴？を調査すべく、踏破したコースをチェックしてみた。完全六九コース、不完全五、計七四コースという数字になった。まあ、まあと言うべきか。不完全とはそこには行ったがコースが違うとか、完全には山頂に立たなかったという意味である。まだ自分では幾分若い気でいるのだからむしろ私のまだ足を踏み入れない二六コースの方こそ二、三の例外を除いて、本当の中高年向きというべきものがあるのかも知れない。参考までにそのコース名をあげてみよう。

・飯能から高麗峠・顔振峠から越上山・越生から大高取山・吉見百穴からポンポン山・皆野から美ノ山公園・古洞峠と大日峠・地蔵寺から観音山・小森から四阿屋山・城ガ尾峠から菰釣山・足ガ久保から鐘ガ岳・飯山観音から白山・権現山と弘法山・渋沢丘陵と震生湖・幕山と南郷山・高麗山から湘南平・武山から三浦富士・福満寺から富山・三宅島富賀から雄山・下仁田から稲含山・六車から大屋山・白岩から栂峠・茂来山と四方原山・奥塩原温泉から塩原富士山・氷室山から根本山・古峰ガ原峠から横根山・向陽台から高鈴山。

コースの分布も近くは網の目が細かく、遠くは網の目が粗いがどちらかと言えば名山ということになろうか。経費と時間のバランスを考えた心憎いほどの著者のコースの選定への気配りの細かさも感じられる。

また、中高年向きといっても『日本百名山』はこの中に一四座を数えているのである。かなりコースにグレード的な差異があるわけで、その点著者はそのまえがきに「…利用に際しては、歩行時間や標高そして各自の体力を考え合わせて活用されたい」と注意をうながしてもいる。登山に当って安全にはもっとも留意すべきことと言えよう。

いずれにしろ中高年山やさんにとって、便利な一冊を更に加えていただいたことを感謝している。

著者は殆どアルコールを口にしない。氏は属するもう一つの山の会、新ハイキングで山での禁酒についての一方の旗頭として強烈なキャンペーンをはった主である。今でもその議論はクラブの中でくすぶりつづけている。酒を楽しみに山に登る私にとってはこわーい存在であるのが浅野氏である。もっとも最近では「ビールの一本ぐらい飲めるようになった」と本人が言っているのでやや安心だ。

話は個人的なことに及んだが、いずれにしろ、私が考えるには、前編、続編合わせて一冊となし、中高年向きの山二〇〇コース（関東編）として利用するのが最もふさわしいように思う。今後更に三〇〇コースも合わせて期待する。

A5判 二四六ページ 昭和五十九年八月十五日 山と渓谷社刊 八八〇円 （小倉 厚）

浮かぶ銀色の雲と褐、黄、桃、黒、灰、白の織りなす〝月世界〟の肌色の鮮烈さは心底に焼き付けられ消え去らない。

そしてこの自然環境に点在するオアシスや村落に生きるラダック人はインドの他地域に見られない蒙古系のチベット人で、彼等の生態、言語、風俗、文化、宗教の一切がインドではなくチベットと同じである。

彼等の社会規範は幾世紀も前、祖先によって建てられた石造り五～九階の僧院（ゴンパ）と、その裡に秘められた壮麗な仏像や曼荼羅で象徴されるラマ教即ち大乗仏教である。

私たちはラダックで、ワカ、ラマエル、チクシェ、シエイ、アルチ、フィアン、スピトウクなどのゴンパに参拝したが、とくに七月七日のヘミスゴンパの年次大祭を見聞するのがツアーの目的であった。その儀式祭典ではラマ僧が、驚くほど華麗絢爛とした衣装や奇怪なマスクをつけて長時間熱狂的に踊り続けるのだが、正に一九八四年の現実とは思えない。

チベットから中国長安で空海に受け継がれ、わが国に渡来した真言密教と同じ大乗仏教は、現在インドでもラダックだけに活きている。

高野山に秘蔵される金剛界曼荼羅がラダックのそれと全く同じ型であることは最近話題となっているが、大日如来を祭るアルチゴンパには最も美しい仏像や曼荼羅が良好に保存されている。一九〇八年、S・ヘディンもこのゴンパを見逃がしていたことをNHKのテレビで知った。日本人が簡単に此地やヘミスに行けるようになったのはここ数年来のことであり、今後各界専門家による探究が進められ、わが国の仏教文化とその原点とのきずなが明らかにされることを期待している。

ラダック人の祖先は幾世紀か前に祖国チベットから集団的にこの地に移って定住し、岩山の頂に一見、現在の大マンションとも見まがうようなゴンパを、鉄材もコンクリートも運搬機材も使わないで建設した。その技術は素人ながら想像に余る驚異である。

そして子孫たちもゴンパの下で乏しい食と苛酷な自然と病に耐えて、長からぬ生を黙々と大らかに活き抜き、華麗な葬儀と祭りに見とられて死に切っていく。私はその生死に、何か〝光り輝やく無常の一瞬〟と言った感動を覚えた。

ラダックに至る数日間のツアーにも忘れ得ぬ想い出や体験が数々あった。明日何が起こるかわからないのがインドである。

先ずニューデリーに到着早々、戒厳令に遭遇した。二日朝スリナガル行の国内便に乗るべく空港に駆けつけたところ様子がおかしく、前日カシミール州に政変があ

秩父 奥武蔵伝説
たわむれ紀行

神山　弘著

「机上の空論」とか「畳の上の水練」とかいうが、著者は自分の足で現地を歩き、その口で尋ね、その耳で聞き、その心で考え、その筆でこの本を書いた。正にオリジナルな著作である。

山歩きの好きな山男が、自分のホームグラウンド、秩父と奥武蔵の伝説や地誌を、豊富な知識を以て縦横に解明してくれる。

書名に、たわむれ紀行と謙遜されているのは、時に想像と推測の翼をロマンチックに拡げているからだろうが、大部分はたわむれどころではない。特に高麗郷の謎ときなど、日本人のルーツに関するので関心が深く面白い。

著者は技術者でありながら、父君の死の時間、遠く大陸の戦野にあって一晩中父君の夢を見た話、奥様の白木の位牌を燃やすとき、名前の所だけ最後まで火をはじいてサインを送ってくれたという話、そういう現代の常識では理解できない現象を見られたのも、著者の感性、人間性の故であろう。

その感性が何気なく見過ごしてしまう地名や伝説に、光をあて想像の綾で飾って見せてくれる。

宝登山と女陰の古語ホトとの関係、秩父、乳部説等読むときのおたのしみ。

文中によく引用される、新篇武蔵風土記稿は、江戸幕府の命で作られた地誌であるが、筆者もつい話につられて書架で眠っている、その複刻版で確認したくなった。

本書は、今流行の表現をするなら、奥武蔵と秩父のハイキングを、「一〇倍楽しくする本」といえよう。

一九八四年五月十日　金曜堂出版部発行　岳書房発売　二〇三ページ　定価一六〇〇円

（神谷恭平）

信濃支部三十五年

日本山岳会
信濃支部編

本会信濃支部が創立三十五年を記念して立派な記念誌を発行した。昭和二十二年六月、初代支部長に槙　有恒氏をむかえて発足した信濃支部は、日本アルプスの中心地に位置する地の理を得て活発な活動を続けて三十五年。この間の支部の足跡が克明にまとめられた。

序章、信濃支部発足以前、第一章、信濃支部三十五年史抄、第二章、ウェストン祭前史、第三章、支部活動、第四章、長野県境地帯一周踏査、第五章、海外登山、第六章、信濃支部主要行事年表と六章にわけ、三十五年間の歩みの跡が正確に記録されており、まことに充実した内容である。

序章では明治三十五年創設の信濃博物学会から筆をおこし、大正八年発足した信濃山岳会の活動に触れている。第二章のウェストン祭についての歴史は、これまでまったく埋もれていた史実を掘り下げ、レリーフ建設から、戦前の上高地からの撤去、戦後の復活までのいきさつが、ここに一本にまとめられており、ことにその取りはずしは、これまでいわれていた昭和十九年ではなく、昭和十七年十二月であったことが明らかにされ、これを探り当てる努力は大変なものであったと思う。

海外登山はニュージーランド、アラスカ、マンキンレー、フォーレイカ、アンナプルナI峰のそれぞれの遠征が報告されているが、ことにアンナプルナについてはページをさいている。

このところ各登山団体がそれぞれ何十周年と銘うって創立記念誌を発行しているが、本書はその中にあっても出色のものといえる。編集を担当された会員小林俊樹氏のご尽力を高く評価したい。

昭和五十九年五月二十五日　日本山岳会信濃支部発行　六二一ページ　写真多数　頒価六〇〇〇円

（山崎安治）

〔「信濃支部三十五年」は年次晩餐会の折に持参し、販売する予定です。信濃支部〕

りスリナガルに戒厳令が施かれ、インド民間機はすべて軍輸送に徴用され、何時解除されるか不明との非常事態を知らされた。一時はどうなることかと不安だったが、幸い数時間後に解除されスリナガルに向かうことができた。空港は厳重に警戒されていたが、住民、観光客は平静で、ポプラ並木の下、ボートハウスの浮かぶ清らかな水面に蓮の花が咲いているといった湖畔風景に見とれていると、戒厳令下とは思えない。翌三日早朝、四〇〇〇㍍級の峠を三つ越す四三〇㌔の険路をバスで二日がかりでラダックに向かった。

豊かな針葉樹に被われた緑の山なみの上に、氷河と残雪の光る岩峰がそびえている。ソナマルグのアルプはスイスかチロルそっくりだった。だがゾジラ峠（三五〇〇㍍）を越すと景観は一変し、草木の乏しいラダックの山となってくる。その日はカルギルに泊った。

翌四日も早立ちでナミカラ峠（三八〇〇㍍）を越える。登りは路肩が悪く、落石の多いヘアピンの連続する未舗装の悪路である。ここで対向車とあわや正面衝突という一瞬があったが、ドライバーの熟練とインド国産車TATAの優れた性能で事なきを得た。最高地点ファッラ峠（四〇九一㍍）を越えるといよいよ一木一草も認め得ないラダックの〝月世界〟となる。刻々変化していく〝月世界〟を随分走って、七時過ぎ目的のレイ（三五〇〇㍍）に到着した。

ラダックではノミ、南京虫、蚊は心配なく、蝿もデリー空港ほど気にならず、二十六年前のインドの体験に較べ環境衛生の点で大きな進歩を感じた。私は幸いに完璧に体調を維持できたが、出発前の予防注射（コレラ、肝炎）、予防薬の服用（消化器伝染病、高山病）、生水、生野菜、酒、特に氷を慎しむ等の基本的注意は怠らなかった。高所ではのどの乾きがひどく、これは飴をしゃぶり続けてしのいだ。

最後にラダック行のヒントと貴重なご教示をいただいた高橋照氏に感謝する次第である。

名誉会員 三田幸夫さん宅を訪ねて

最近あまり外出されない三田さんを有志でお訪ねし、楽しいひと時を過して戴こうという話が出たのは、早稲田の完之荘での有志閑談会の帰りのことだった。発起人は山崎安治さんと近藤信行さん。閑談会の散会後、はしごをしているうちに当日、三田さんがおいでにならなかったことに話がおよび、有志で三田さんのお宅にお邪魔しようということになった。

横浜市鶴見区岸谷（きしたに）のお宅をお訪ねしたのは梅雨の明

梓会創立秘話

――梓会七十周年と創立者田部重治先生十三回忌を迎えて――

茶谷東海

大正五年初夏の一日、海軍経理学校の校長室では、田部重治先生（英語担当）が、昨日教官会議で賛成を得られなかった山岳部設置問題について懇談のため、校長相良主計総監（中将）と向い合っていた。

―以下、昭和三十七年八月、日本山岳会で田部先生の推挙により、私が会員（五一五二）に決定した時、先生が、多少の記憶違いがあるかも知れないが、と前置きして話された一問一答の概要である。

校長　では、教官会議で山岳部設置に賛成を得られなかった主な理由は何でしょうか。

先生　兵学校、機関学校には山岳部はない、危険の恐れがある、経費を補助する訳にはゆかぬ、などのようです。

校長　やはり岩登りや雪山登山もするのですか。

先生　そんなことは考えていません。大体ロッククライミングは英国の如く高い山のない所で発生したもので、日本の如く三千米級の山の多い所ではその必要はないと思います。登山は夏休暇を利用して北アルプス等へ登ることを考えています。

（この頃、教頭と監事、教官数名傍聴のため、校長の許可を得て入室）

校長　危険の恐れはありませんか。

先生　私は常々生徒に対して山で死んだら犬死である。生徒は法制上、準軍人であるから死所は戦場でなければならないと話しています。また教官有志の同行を勧めています。

校長　本校生徒の教育上、何故登山が適当か一言にして言うと。

先生　本校生徒は兵学校や機関学校の生徒同様、旺盛な愛国心を持っています。然しその愛国心たるや概ね観念的で具体的に日本の国土を殆んど知っていません。国土の七割は山です。山に登って日本の国土を知れば愛国心は一層強固なものになるでしょう。

校長　（A監事に）兵学校や機関学校の山登りについて知っていますか。

A監事　兵学校では常時全生徒が古鷹登山を励行しており、また年一、二回宮島の弥山登山競争を実施しています。機関学校でも青葉山強歩をやっている由であります。

校長　（B教官に）若干の筆紙、墨、文具くらいのものは支給できるでしょう。また同行の教官の汽車賃くらいは出ませんか。

B教官　主計長に話せば可能かと思います。

（この時、紅茶とケーキが運び込まれ、教官数人がさらに呼び入れられた）

校長　（C教官に）登山に熱心な生徒は誰ですか。

C教官　二学年の稲岡新、一学年の宮本正光、等松農夫蔵、樺山勲、山田寿吉生徒などです。みな優秀な者ばかりです。

校長　（A監事に）生徒が北アルプスや富士山に登るとき教官諸君で同行する者がおりましょうか。

A監事　少佐、大尉級の教官は喜んで参加すると思います。

（以下二、三のやりとり省略）

校長（立上って）校長としては田部先生のご提

けきらぬ七月二日（月）のこと。

早寝早起が最近の習慣となっている三田さんがその日は昼寝をし体調を整えて、奥様と二人で私達を迎えてくださった。

奥様にあまり面倒をおかけしないようにと金坂夫人の手を煩わせた料理やデザートと、ウェスキーやミニダルを持参し、夕方の五時頃から四時間近くにわたって楽しいひと時を過ごさせて戴いた。

一九〇〇年生れの三田さんは、思った以上にお元気で、ウェスキーや煙草を楽しそうに口にされながら私達のおしべりをにこやかに聞かれていた。

部屋にはサマヴェルのエヴェレストの絵、アルバータの航空写真、坂本直行さんの絵、エーデルワイスの押花などが飾られ、本棚には多くの和洋書の中に槇さんから贈られた『マナスル登頂記』の特装版（限定三十部のうち二十番本）などが蔵められていた。

三田さんの近著『わが登高行』を編集した島田さんと近藤さんが両脇に座りもっぱら三田さんの話の聞き役をつとめられていた。私達はアルバムを拝見しながら若き日の三田さんの颯爽とした姿の数々に目をみはった。

秩父宮殿下や大島亮吉の写真、松尾峠における遭難の直前のものと思われる写真やマナスル遠征時のものなど、いづれも貴重な写真の数々であった。

三田さんは終始にこやか、温容で、山を愛する老若男女の訪れを心から楽しんでおられたようであった。

追悼

網倉志朗氏

（会員番号一八五三）

「アミさん」と親しまれ、会の集りによく参加して知友も多かった網蔵さんは、六月十七日召天、東京代沢の三一教会での葬儀のあと献体を収容する車に乗って私達の視界を去って行ってしまった。

明治四十四年一月山梨県の名家に生れ、甲府中学から立教大学へ進み、昭和三年五月には中学同級の今井友之助会員と八ケ岳へ登る。山とスキーの話はいろいろ聞いたが、だれとが中心で、いつ、どこでのことであったか定かでない。昭和四十二年七月の藤島敏男会員と火打岳・焼山の往復、四十六年十月の平沢・三田両長老と台湾の玉山登山のときは、共に長老に対して極めて敬意を払った言動で終始した。普段は口が足よりも達者でブリザードなみ。日本製より海外輸入の山やスキーの道具を愛用。晩年はラグビーグラウンドで倒れ再起至難と思われたが程なく上高地の山研や静岡支部のもみじ会に現れ、志賀高原ではボーゲンで滑ると頑張った。心配する仲間に、まだまだ元気だと強がったりして自分の意志を華やかに通して、最後は、仲良しの折井健一さんと同じパターンで、独り静かによき人生を残して逝った。

（錦織保清）

案の山岳部設置に賛成します。

（座って、教頭に）教頭如何ですか。

教頭（立上って）私も賛成します。

校長　監事、教官は如何ですか。

A監事（立上って）一同賛成のようであります。

校長　では山岳部設置を決定します。田部先生よろしくお願いいたします。

先生（立上って）ありがとうございます。生徒もさぞや喜ぶことでしょう。会の名は上高地の梓川に魅せられた生徒が「梓会」としたいと申しますのでそのように考えます。

校長　今日はもう時間がありませんが先生にもう一つ丈け、先生は何故山へ登られるのですか。

先生　それは山が好きで登らずにおられないからです。山へ入って静かに自分を見つめると山と自分が一体となります。何か思案に餘るときは必らず山に入ります。すると何となく問題が解決してくるのです。

校長　長時間ありがとうございました。また時々山のお話をお願いいたします。

―その翌日、海軍省教育局の主務局員から山岳部設置了承の電話があった由

（梓会会長）

最後に、この日の記念のために三田さんを囲み全員で写真を撮り私達はなごりを惜しみつつ岸谷のお宅を辞した。

参加者　島田　巽　山崎安治　金坂一郎　近藤信行　織田沢美知子　山村正光　泉　久恵　松家　晋　近藤　緑　滝川　清　以上十名

（滝川　清）

ミルツご夫妻を囲んで／国際文化会館にて

スイス山岳会ミルツ会長ご夫妻歓迎会

十月十日（水）午後六時三十分より、六本木の国際文化会館において、スイス山岳会会長（一九八三～八五、中央委員会ニューシャテル選出）ヘルマン・ミルツご夫妻を囲んで歓迎の会を催した。今夏、スイス山岳会事務局で本会の佐々会長が偶然お会いした

のが縁で、このたび韓国で開かれたUIAA総会に出席される途中立ち寄られたとのことであった。

歓迎会では佐々会長がミルツ会長について紹介し、そのあとミルツ会長が挨拶した。

長身でほっそりとしたSAC会長は、言葉で日本山岳会に寄せる好意を表明されだけでなく、気さくに一人ひとりのところへ歩み寄って話しかけ、兵役義務を果たすとき通信隊の大尉だという階級など微塵も感じさせず、また会員数七万二千のスイス山岳会、さらに年度ごと八億円もの総資産（不動産は含まない）を運用する会の会長とはとても思えない謙遜な人柄を示された。

席の隣に座られた田口副会長夫人と母国語で親しく話をされている様子に、スイスという国を改めて強く感じた。同会長は五十七歳とのことであった。

突然の訪問で、本会側には行き届かぬ点もあったが、出席した者一人ひとりが示した誠意だけは感じとって頂けたようである。

出席者 ミルツSAC会長夫妻、佐々会長、田口副会長夫妻、吉田宏、坂倉登喜子、鈴木郭之、神崎忠男、早川瑞璃子、岡沢祐吉

（岡沢祐吉）

真瀬岳山行報告

秋田支部

本年度上半期の支部山行は、去る六月二十四日、秋田・青森県境に鎮座する眞瀬岳（九八七・七メートル）において実施された。

眞瀬岳は、最近青秋林道問題で話題となった二ツ森のすぐ隣りに位置し、標高こそ低いが山懐は深く、附近一帯は秋田杉の造林地として地場産業の山容を示している。地元八森町の北方にピラミッド型に遠望され、古くは「日本山嶽志」に八森岳として紹介されている。

午前六時、支部長宅を車で出発。八森町の林道入口で全員集合し、一路、眞瀬林道へ。一時間ほどで終点の駐車場に到着し、九時三十分登り始める。

駐車場前の沢を渡って旧車道を少し行き、杉林の切れた所で旧車道と別れ、左方の不明確な道を辿ってすぐ金山沢を渡る。対岸の登り口に注意し、杉林の中の小沢添いを辿り、途中の分岐を右にとると電光型に造られた杉造林地内の登りとなる。登り切ると眞瀬岳から伸びた稜線に出る。

登山道はこの稜線上にあり、カラ松の造林地と大岩を越すと笹と灌木の急登となる。

左前方に白神山地、右方に二ツ森の山々が美しく望まれ、眺望とタケノコ採りに夢中になってなかなか前進しない。ブナ林を過ぎ、十二時三十分、予定より大幅に遅れてマイヅル草の群生する山頂に到着した。

昨年の二ツ森支部山行の際、眺望出来なかった青森側の山々が一望でき、広大な原生林を見渡すことができた。

昔の思い出話等、山談義しながら昼食。欲に憑かれた某会員はタケノコ採りに夢中である。

昭和初期より林業事業に力を入れ、膨大な杉造林地となった眞瀬の山々は、地元にとって既に生活の山となっていること、白神原生林の調和ある自然保護の必要性等を再確認し、十四時少し前に下山開始、十五時、駐車場に無事帰着した。

さっそく河原で打矢会員差し入れのカモ鍋で乾杯、四方山話に華を咲かせ十七時散会した。

参加者 岡田光行、進藤昭、佐藤兼治、中川広三郎、北林嘉鶴子、福田光子、打矢道雄、佐々木宏、伊藤康二、佐々木民秀、会員外三名（成田、鎌田、佐々木）

（佐々木民秀）

蝦夷お月見会

北海道支部

北海道支部の『お月見の会』も回を重ね十三回を数える。今年は九月八日、後方羊蹄山麓の真狩村山丈荘を観月会処とした。

マツカリヌプリ（蝦夷富士）と称される後方羊蹄山は、標高六千四百十二尺、山姿秀麗にして、山型は、一様に逆擂鉢で四方より望んで殆んど同じ形である。

山丈荘は、橋本支部長の山荘で、その夜は北海道支部貸切りのお月見と相成った。午後六時、橋本支部長の挨拶、女性会員の手でスキが生けられ、お月見団子が供えられる。味自慢おでん、しゃぶしゃぶ、チーズフォンデュと、好きなものが食べられる趣向である。料理に腕をふるう女性の参加者が入れ替り立ち替り調理に、御酌に、ドリンキングに、とお忙しである。

山荘の外に出ると、十三夜の月が、木の間より晴れ上った夜空に皓々と冴え渡る。カラオケに合せ山の歌が、次々と唄われる。

参加者一同、食欲の秋とばかりに飲み、食い、歌い、騒ぐ。

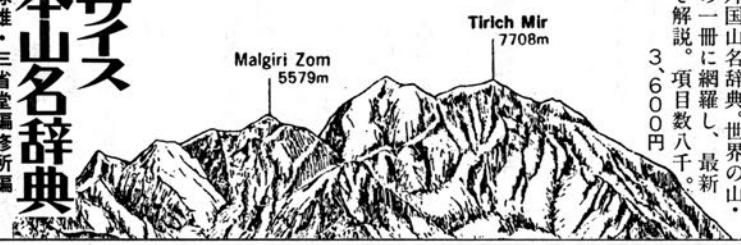
翌朝は、雨模様のため登山をあきらめ、山荘備えつけのワイン、ボルドーの限定年代ものの開封をし…、羊蹄の湧水を容器に詰め、昼過ぎ温泉巡りの方々を見送り帰途についた。

出席者・順不同 新妻徹、三浦勝幸、小林年、末岡睦、山田恵三、野口礼子、赤石喜恵子、亀井秀子、石井忠雅、橋本誠二、平野明、沢田長子、松倉由美子、横田春雄、斉藤初代、久保田優一、牧野昭蔵、牧野ともみ、水科行雄

世界の山々を手中に！

コンサイス外国山名辞典 新発売
●吉沢一郎監修／三省堂編修所編
十年の歳月と多数のアルピニストの協力を得て完成した、わが国初の外国山名辞典。世界の山・峠をこの一冊に網羅し、最新データで解説。項目数八千。3,600円

コンサイス日本山名辞典
●徳久球雄・三省堂編修所編
登山の山・文学の山・国を分ける峠など、日本のあらゆる山・峠を収録。この一冊で日本の山を踏破。項目数一万三千。2,200円



SSD 三省堂

ビールパーティ報告

婦人懇談会恒例のビールパーティが、九月一日（土）山岳会ルームにて行なわれました。今年もおかげさまで大盛況。ビールジョッキを片手に、婦懇、心づくしの料理をつまみながら、大いにお喋りを楽しんでいただけたものと思います。今後も皆さまに喜んでいただけるパーティにしていきたいと思いますので、ご意見ご希望などございましたら、どしどしお申しつけ下さい。ありがとうございました。

＜参加者九十九名＞

（麻生由紀子）

お知らせ

◉最新山スキー用具説明会

日時 11月29日(木)午後七時より
場所 ルーム集会室

集会委員会

＊

◉昭和五十九年度年次晩餐会と記念山行

日時 十二月一日(土)午後六時より
場所 ホテル・ニューオータニ 芙蓉の間（千代田区紀尾井町四 ☎03-265-1111）
会費 一万円（記念品代を含む）
○バー開設 午後四時三十分より
○受付開始 芙蓉の間入口にて午後五時より
○販売品コーナー 芙蓉の間入口

＜晩餐会記念山行＞

本年は丹沢の大山へ登り、広沢寺温泉へ抜けて一浴のあと解散の予定です。
集合 十二月二日(日)午前八時半小田急線伊勢原駅北口
費用 三千円（含記念品代）
所持品 雨具、昼食

総務委員会

＊

◉忘年会

日時 十二月十五日（土）十八時半より
場所 山岳会ルーム
会費 二、〇〇〇円
●これは会員懇談会も兼ねています。
主催 婦人懇談会、集会委員会、総務委員会

＊

◉アルパイン・クラブからの書信

アルパイン・クラブの近況その他を伝える書信が、同会から届いています。コピーをルームに備えますから、興味ある会員はご覧下さい。

海外委員会

会務報告

九月理事会

9月3日 午後6時30分
場所 本会ルーム

出席者 田口、山田副会長、神崎、田村、水野、梅野、松家、赤松、平野、高遠、平井、絹川各理事、竹田監事、鳴原、宮下各評議員、岡沢理事代行
委任 佐々会長、長谷川、鈴木、西村、大倉各理事、松田監事
報告事項
○外務省よりヨーロッパ・アルプスについての登山指導の通達あり会報に掲載
○ソ連登山家来日、パミールで世話になっているので、上高地山研利用は本会で面倒をみる
○「山岳」の編集ほぼ完了
○貴重フィルム「マナスルに立つ」の複製完成
○婦人懇談会のセミナーを十月から開催
○会報原稿で各委員会に関係あるものは、理事、委員会責任者を通じて提出するよう要請あり
○自然保護全国集会を東京で十二月一日に、年次晩餐会の前に開催
○カンチの一般向け報告会は終ったが、登山家仲間として内容を具体的に紹介する会合を今後予定している
八十周年記念事業について
(1)海外登山分科会
カンチ登山は成功、来年のボゴダ登山の準備に入った。
(2)集会分科会
徐々に進展中、計画案がほぼまとまった。
(3)行事分科会
展覧会計画中。山岳博物館的資料の収集はすすめる。
(4)募金分科会
八月三十一日までの応募状況、応募金額一四、七〇〇、六六三円、入金は約八〇%、応募会員数はまだ全会員の二七・一%であるので、今後未応募会員に再度呼びかける。

ルーム日誌 九月

1日（土） ビールパーティ
5日（水） 募金委員会
7日（金） 科学研究委、指導委
8日（土） 科研委シンポジウム
10日（月） 図書委
18日（火） 自然保護委
20日（木） フィルム委映写委
27日（木） 会報編集委、海外委
28日（金） 指導委
29日（土） 三水会

今月の来室者361名

会員移動

改姓
9311 清水 祐子→大滝夫婦会員へ
7636 大滝 憲司郎
9311 大滝 祐子

物故
826 吉田 久兵衛(9・7)
5971 市東 貞雄（9・15）

八十周年記念事業募金応募者ご芳名（昭和五十九年九月三十日まで、敬称略、順不同）

（六口）山田二郎（京都）（追加二口）大塚博美、田村扇一、福田泰次（四口）安間 荘（追加二口）阿部郁夫、山本朋三郎、河村憲二（二口）浅原重継、石間信夫、渡辺昌一郎、中保、畠中善弥、宅間清子、川井耿子、水井謹作、柴田初子、大橋晋、望月雅郎（一口）石井貞吉、加藤節子、内田英夫、望月福次、木南金太郎、鈴木淳平、阿部勇作、中西章、及川敬一、平柳一郎、岩崎昭一、戸塚守夫、木原 均、小林岳彦、稲垣純男、神谷光昭、三枝明徳、篠田公平、佐藤 進、三鍋久雄、小菅玉樹

応募会員数累計 一一二五名
応募口数累計 三〇一五・一口
金額累計 一五、〇七五、六六三円

誤植訂正 会報472号一ページ一段目、浅原健雄、松方峰蔵とあるのは浅原健蔵、松方峰雄の誤りで。

図書受入報告書

図書委員会

昭和 59 年 7 月分受入図書（つづき）

8. 本多信男著「愉しい木工作」山と渓谷社　1984（版元寄贈）
9. 藤田和夫著「日本の山地形成論」蒼樹書房　1984（版元寄贈）
10. 福岡山の会編「せふり」合本　第5～7巻（1956～1967），第8～12巻（1968～1972），第110～133号（1973～1976），第134～169号，総目次（1932～1982）（編者寄贈）
11. 福岡山の会編「1972　ヒマラヤの旅（せふり発刊40周年増刊」1973（編者寄贈）
12. 立正高等学校山岳部　中国ボゴタ山登山実行委員会編「登山報告書　無名峰（4,613 m）・剣石Ⅱ峰（4,304 m）中国新彊維吾児自治区　1932」1982（編者寄贈）
13. 串田孫一著「山岳詩集　山」文京書房　1981（版元寄贈）
14. 田中清光著「山上の竪琴」文京書房　1982（版元寄贈）
15. 鳥見迅彦著　詩集「かくれみち」文京書房　1983（版元寄贈）
16. 春日俊吉著「山の受難者物語」森林書房　1984（版元寄贈）
17. 春日俊吉著「山の遭難生還者」森林書房　1984（版元寄贈）

（以下次号）

あとがき　毎号、この会報のため海外の山々に関する記事を書き続けてきてくれた片山全平委員が、急逝されました。原稿を私に渡すため、夜の十一時ころ、近くの駅まで届けてくれたこともありました。ご冥福を心から祈ります。（O）

昭和五十九年十一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂